

---

# なのは一途のはずがどうしてこうなった？

葛根

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なのは一途のはずがどうしてこうなった？

### 【Nコード】

N7866Z

### 【作者名】

葛根

### 【あらすじ】

高町なのは一筋の主人公だが、何故か共有物扱いに追い込まれる。

本命の高町なのはを筆頭にどこかおかしいヒロインたちが紡ぎだす物語

## プロローグ（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りとマジで原作崩壊しています。

## プロローグ

高町なのは達との初めての出会いは約10年前だ。

管理局の訓練学校で同い年。

それだけの理由で話しかけられた。

当時の年齢でランクAAAクラスの魔導師は珍しく、高町なのは達は異常であった。

されど、ミウラ・ケイタもまた、異常な人物である。

ミウラ・ケイタは管理外世界の住人であった。

だが、高町なのは達の話の話を聞けば聞くほど、似た世界で生まれ、育った。

第97管理外世界「地球」が高町なのはの出身である。

一方、第48管理外世界「アース」がミウラ・ケイタの出身だ。

文化レベル。魔法の有無を含めて極めて似た世界であった。

それらを話の種に互いが語り合い、仲良くなったのは当時の年齢から男女の区別の意識が低くまた、同年であることから、友人となるまでに時間は掛からなかった。

そして、極めつけはミウラ・ケイタの保有する魔力量であった。

ランクこそ彼女達に劣るものの、魔力量は彼女達の総合魔力量を超えていたのだ。

さらに、レアスキル持ちである。

それは、魔力供給だ。

ミウラ・ケイタは高町なのは達の同期に比べ、出勤回数が異常に多かった。

その理由として魔力供給と魔力量の組み合わせからなる補助の役目を担うという役割を持っていたからである。

つまりは、補給物資扱いだ。

だからこそ、本来のランクとは関係なしに、危険度の高い任務や、災害救助などの事件を多く経験することになり、それがミウラ・ケイタの戦術、戦略眼を育み、成長させ、開花させる要因となったのだ。

奇しくも10年間と言う歳月の殆どを現場から学び、生き延び、時には役に立ち、戦い続けた事で彼の経験値は膨大なモノになった。そして、現場での役割を一旦終え、というか、ギブアップして。ある年から教官を目指す。それは、管理局員の若手育成を目的とした戦技教導官であり、戦術講師であり、現場において生き延びる術を教える立場になるうというものであった。

何故、教官なのか。

それは、安全だから。そして、楽しんで仕事をしたかったからだ。

そんな半端な思いで受けた戦技教導官試験は見事に落ちて、同期の高町なのは一発で合格した。

結局、高町なのは遅れること3ヶ月後、二度目の試験で合格を掴みとる。

彼女は忙しい中、ミウラ・ケイタの試験対策に時間を割き合格時にはきちんとお祝いをしてくれたのだ。

その時からだろうか。

彼が彼女を意識し始めて、彼女が彼を意識し始めたのは。

互いに奥手であり、忙しくなった為会う時間が減った。

そんな中でも月に一度は二人で食事に行ったり、洋服を買いにいたり青春らしい青春を送り、ついに男のほう告白をしたのだ。初めてのキスは18の時であった。

互いが意識し始めて3年の月日が経った頃の話である。

しかし、相手はエースオブエースの称号を持つ管理局の人気者だ。

交際は秘匿するものであると男は説得する。それに、渋々了解をした彼女は怒りもしたが、自分の為という事も理解していた。互いに男女として認め合い、相思相愛の関係だ。自然と肉体的な欲求が湧き上がり、そういう行為をしようと決心して、日にちまで決めた。いざ、行為をしようという雰囲気が高町なのはの部屋で求め合ったのだが、どこからかその情報がリークされており、秘匿されていたはずの交際がフェイト・テストロッサ・ハラウン、八神はやて一同の寝室突入という形でバレってしまったのだ。

「申し開きは？」

言及するのは高町なのはの親友であるフェイト・テストロッサ・ハラウンである。

彼女は表面上は怒っていないように見えるのだが、長い付き合いのミウラ・ケイタにはその内情が手に取るように理解できた。それは、つまり怒っている。

「えー、秘密にしていたことは申し訳ない。だけど、真剣交際！  
そう！ 真面目にお付き合いをしています」

「機動六課立ち上げ前にスキャンダルは困るわ」

苦笑いの八神はやてもやはり、表面上はいつも通りだが、怒っていた。

「フェイトちゃん、はやてちゃん。秘密にしていたのはごめんだけど、ケイタが言う通り、清いお付き合いを」

「嘘！ だって、その、しようとしてたじゃない！」

顔を赤らめ叫んだのはフェイトだった。

「その、なんだ。まだ未挿入だったから良いじゃないか。テスト口  
ツサ」

シグナムは味方らしい。

「どうだかな。隠れて付き合ってたんだ。一回位してんじゃねーの  
？」

幼女体型の赤い格好のヴィータが容姿に似合わない発言をする。

「でもでも、ゴムも準備してましたし、日付的にも安全日ですよ」  
医学的見地から意見するのはシャルル先生だ。彼女はどこかずれて  
いる気がする。

「……」

俺以外の唯一のオス。ザフィーラは沈黙を守ったままである。

「と・に・か・く！ そういう行為はお預けや！」

激を飛ばすはやてにヴォルケンリッターは頷く。

夢にまで見た初体験はタヌキ同盟に阻止されてしまった。

後日解ったことはなのはのスケジュールと俺のスケジュールをハッ  
クして閲覧したのはリインフォースだったということだ。

子供を過ぎ大人の階段を上がる。  
友人はそれを阻止し足を引っ張る。

配点：（謀略）

なのはの意見が多かったので勢いで書いてみた。

基本的にギャグ方向に走る。

シリアス？ 何それ美味しいの？

更新は不定期。続くかはしらん。



## プロローグ(後書き)

誤字修正

## 第一章 謀略と方向性（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

## 第一章 謀略と方向性

男女の仲を意識した上で肉体関係を結ぶはずが失敗に終わった。互いに若く、欲求に素直であった。

一度の邪魔でめげるような精神を持ち合わせていない。不屈の精神の持ち主である高町なのはは再度の密会を求めたのだ。

『今度私達が会うときにはちゃんとしようね』

フエイト・テストロッサ・ハラオウンは長年の友人に疑惑を持つ。好きな人ができたらお互いに教えあおう。

それを破ったのは他ならぬ高町なのはであった。

その約束はまだ互いが幼い頃にしたもので時効があるのなら既に時効を迎えていると思う。

それに、私も約束を破っていた。

高町なのはの恋人であるミウラ・ケイタが好きなのだ。

それも、出会ってから直ぐの事だった。

私と同じで両親がおらず天涯孤独の男の子。

明るくて優しく初めての異性の友だちだ。

執務官試験に落ちた時は一緒に悲しんでくれた。

過去問題や傾向と対策を彼が集めてきてくれた。

それでも、試験には二度落ちた。

二度目の時は慰めてくれた。

『諦めたら終わりだ。だからさ。落ち込んで、一番下まで落ち込んで』

だらあとは上がってくるだけだよ。それに、頑張っているフェイトの事、尊敬してるんだぜ?』

三度目の試験で合格した。嬉しくて嬉しくて、泣いた。

『すげーぜ! よっし。祝いだ! ケーキパーティーだ』

義母のリンディ・ハラウンと義兄のクロノ・ハラウンとなのは達を集めてくれて、お祝いパーティーをした。

その時、私は彼を好きだと感じた。

本当の家族がない彼は祝う事があっても祝われる事がない。

私が家族になつてあげると。

言いたかった。

それが好きの始まりだった。

だが、今の今まで好きと言えなかった事に後悔をした。

「だって、恥ずかしい」

自分から告白するのは。

だから待った。それがいけなかったのだ。

ならば、

「振り向かせる。それとも、う、奪う?!」

妄想だ。落ち着こつ。

恋愛経験のない自分ではわからない。だから聞こつ。

「バルディッシュ。どうすればいいと思う?」

『既成事実を先に作ってしまえば男というものは責任を取ると判断できます』

長年付き添ったインテリジェントデバイスの判断だ。  
恥ずかしいけど、それが正しいはず。

「それは、つ、つまり。え、えっちな事をなのはより先にするって事？」

『イエス、マスター』

フエイト・テストロツサ・ハラオウンの間違いは、機械であるデバイスに解答を求めた事でありそのデバイスもまた効率を求める機械であった。

つまり、効率的に相手を倒す事を示すデバイスは、

『ユー、やっちなよ。特に大切なのは避妊具を使わないことだぜ。マスター？』

妊娠という最大の結果を周りに理解させることがマスターの求める女の勝利だと導いたのだ。

八神はやては己が従えるヴォルケンリッターを招集していた。

「会議や！」

激を飛ばす。

「出遅れたで！ まさかなのはちゃんがミウラっちとお付き合いをしているなんて恥やで！ なあ？」

八神はやての予定は崩れた。

本来なら機動六課にミウラを入れて上司権限であんなコトやそんなコトをしようと策略を練っていたのだが思わぬ失態をした。

「しかし、主よ。あの二人が本気で付き合っているのなら身を引くべきでは？」

烈火の将、シグナムが正論を言う。

「アホか！ シグナムがミウラっちでオナってんの知ってんねんで?!」

「な、何故ソレを！」

烈火の将は顔を烈火のごとく赤くした。

それはプライベート侵害！

「リインは何でも知ってますですー」

よおし潰そう。プチっと潰そう。管理人格だろうが、プライベートは守られるものでなければいけないはずだ。

「ちなみにシャマルが一番回数が多くて次にシグナムで最後にヴィーたちちゃんですー。この淫乱豚どもですー！」

自分と同じ境遇の人物がいて安堵する。

よかった自分だけじゃない。

こんなに嬉しいのは久しぶりで涙がでる。

「そーゆーわけで、皆ミウラっち好きなのは知ってんねん。だから、手に入れるのは当たり前やろ？」

「はやてちゃん。何かいい手があるの？」

シャルが顔が赤いまま聞いた。

ヴィータは俯いている。ダメージが大きかったようだ。

「最終手段や。既成事実を作る！ やってしまえばこっちのもんや」

「主はやてよ。そ、それはつまり、どうゆう事ですか？」

聞く。

まだ主と呼ぶ辺り私は忠実な騎士だな。

「アレだ。はやての隠してる本にあった逆レイプってやつだろ？」

ヴィータ！

どこでそんな風に染まってしまったのだ？！

「ぐっ。私の秘蔵の本を……。まあええ。不問や。実際、ヴィータ

の言つとおりミウラっちを襲うんや」

「はやてちゃん、それって犯罪じゃ？」

シャルが不安に思っている事を告げた。

「大丈夫ですー。女性から男性への強姦被害は通報される方が少ないですー。もし通報されても、もみ消す準備は万全ですー」

「そういうことや。機動六課設立とミウラっちを逆レイプするとい  
う任務。大変だとおもっけど。頑張つてやー！」

「はい！」

女達の声が重なる。

置物となっていたザフィーラはミウラの身を案じ静かに思った。

もげろ、と。

決心と覚悟

己の運命が知らず決まる

配点：（被害者）

原作崩壊がこれほど楽しいとは。  
キャラがおかしくなってる。

だけど後悔はしていない。

今後も崩壊キャラがでますので、原作を大切に思う人はここらで読むのをやめてください。

注意はしました。



## 第二章 人事異動と恋人（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

## 第二章 人事異動と恋人

若干19歳でありながら歴戦の英雄達と出動回数が並びつつある人物がいる。

伝説の三提督の一人は言う。

『私の若い頃でもあんなに使い回される奴はおらんかったよ』

さらにもう一人は、

『確かに。しかし、本人も満更ではなさそうだった。実に勤労者だ。若い子はアイツを見習え』

最後の一人は、

『そろそろ我等に戦歴が並ぶんじゃないかね？ 威厳が弱くなりそうだから人事で教官にしようぜ。アイツ、戦術と戦略眼は我等に並ぶ勢いだもん。若い奴に負けたくないんだからねっ』

つまり、本人の望みと上層部の望みが一致したのだ。

人事異動通達。

お前、生意気にも戦歴がすごいから教官にしてやんよ。

エースオブエースと同じ教導官な。あれ？ 資格もってんの？ お

い！ 人事なにやってんの？

まあいいや、人事異動命令ね。

エースオブエースと協力して精鋭を育ててね。　ここマジな。  
あと、エースオブエースはマジ怒ると厄介だから怒らすなよ？　絶  
対だぞ！

追記

機動六課頑張ってるね。

三提督一同より。

え？　これ、マジ？

人事部に緊急で呼ばれて来てみれば伝説の三提督から勅命で人事通  
達が届いていると人事の女の子が慌てて、でも内容みて俺が吹いた。

「ミウラさん。伝説の三提督からの人事通達なんて前代未聞ですよ  
?!」

人事の女の子は俺と同じ年位である。あの伝説の三提督からまさか  
の指令だ。

一般的な管理局員には雲の上の存在だ。

「そうらしいね。俺、教導官だつて。前々から申告してたのが通っ  
たと思つて死力を尽くします」

敬礼。

人事の女の子は慌てて返礼。

「あの、サイン下さい。ファンなんです。最新刊買いました」

そうやって最新刊である『訓練生の苦難』を胸の前に出した。ささっとサインを書いて

「購入どうも。今後も難シリーズをよろしくね」

「はい。ありがとうございます」

立ち去った。管理局員でサインをしたのは何人目だろうねえ。数えきれない。

自分の体験した訓練学校時代をフィクションにして物語を作って某出版社に出したら佳作扱いで受賞して、そこから難シリーズが意外に人気がでたな。

趣味で書いた物語で思わぬ副収入を得ているので金はある。

だが、暇がない。だから現場から教える側に移動したかった。

今回の人事は渡りに船だ。

特になのはと一緒に仕事ができるのが嬉しい。

人事で良かったと思える日だ。大ファンである作家が目の前にいたからだ。

訓練生の困難、訓練生の至難、訓練生の苦難と続く難シリーズと一般的には呼ばれている書籍だ。

さらに、射撃の心得、体術の心得、空戦の心得、陸戦の心得と続く心得シリーズの著者でもある。

どちらも管理局員を中心に人気が出て一般書店にも並ぶ様になった書籍だ。

作者のミウラ・ケイタさんに会えた。サインを貰った。

写真が取ればよかったんだけどさすがに仕事なので自重した。

顔は悪くない、むしろ良い方だと思う。

思った通りの人柄で良かった。

後で皆に自慢しよう。

「うっす！」

「アレ？ ケイタじゃないか。無限書庫に何か用？」

ユーノ・スクライアだ。

彼は管理局の七不思議の一つ。というか疑惑がある。

実は女の子なんじゃないの？

だがそれは確認済みである。

「なに、お前の顔を見に来た」

「ふーん」

薄い反応である。

理由は明白で、彼が男である証明に股間を握った時から親友から友人へ降格したのだ。

それに、同人活動でユーノ・スクライアが犯されまくる物を同人即売会で発売した事がバレた辺りでかなり怒られた。

でも、その年の一番の売上だった。

「まだ怒ってる？」

「そりゃね。僕がBLの主人公で性欲を排除する糧になってるんて知らなかったからね！」

半年も怒ってるんてケツの穴の小さいやつだ。

まあ、そのケツも今では一部に狙われているとかで申し訳ないと思う。

「謝つたる？ それにエロデータ上げたじゃん。何？ 今度は合コンか女の子紹介すればいいの？」

「そついう問題じゃないよ！ 僕を女装させたコラとか完成度高すぎだよ！ 未だに後輩に『ユーノさんって女の子なんですか』って聞かれる気持ち君にわかる？ わからないだろ？ 次やったら絶交だからね？」

うむ。

「マジすまん。でもお前の顔だったら勘違いする。もっと男らしい格好すれば？」

「はいはい。じゃあね。仕事だから。君も仕事あるんだろ？ こんな所で油売ってないでさつさと戻れよ」

今日も許してくれなかったか。今後は自重しよう。ユーノを怒らせると怒り期間が長いからな。

偶然。たまにあることだが管理局内でなのはとぼったり会った。

「帰り？」

「うん」

なら一緒に帰ろうとなるのは恋人同士なら当たり前の事だ。

「人事で今度からなのはと一緒の職場になるよ」

「ほんと？ そつかあ。やっと人事通つたの？」

以前から一緒に働くために人事に申請を出していたことを思い出し

たように聞いてきた。

「まあ、そんな感じ。で、今日この後どうする？」

それは肉体関係を結ぶかどうかの問いである。

「ホテルにしよう。やっぱり部屋だとフェイトちゃんとかまた邪魔して来そうだしね」

「わ、わかった」

気迫のこもった表情だ。それに若干赤い顔だ。

きちんと確かめたい。そして繋がり合いたいと思う。  
だからこそ、

「これからよろしく」

「うん！」

お願いした。

期待するのは職場か行為か。

配点：（恋人）

前回注意したので苦情等受け付けません。

あと、時空系列的には機動六課立ち上げ前です。

まあ、あまり気にせずに。

そのうち戦闘とかあるはず。たぶん。

### 第三章 結びと親友（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。



### 第三章 結びと親友

ホテルと言つても様々な種類のホテルがある。

高町なのはが選んだホテルは所謂高級ホテルであつた。

レストランで食事をして、そのまま宿泊になる。

表向きは今後の教導官同士での語り合いである。

仕事である以上領収書を切るのだが、その辺りが高町なのはの小狡い所であつた。

さらには、昨日高町なのはの友人たちに釘を刺されたのにも関わらず翌日にまさか約束を違えるとは思ひもよらなかつただろう。

だからこそ、二人きりでホテルに外泊できたのである。

事の始まりは高町なのはからであつた。

唇を求め合う。

唐突ではあつたが、そういった行為をすると約束をしていたので応じた。

お互いに管理局から支給された制服であつたが、それはすぐに無くなり互いに生まれたままの姿になつた。

息を呑む。

「綺麗だ」

それが男の感想であつた。

女性の身体という物を初めて直視したのだ。

「明かり消して、恥ずかしい」

薄暗い光の下の一つのベッドで重なりあう。

互いに初めてである。

それでも、男の方がリードする。

知識だけは人一倍あると自負する男は女の身体を喜ばせる事にした。完全に受けるだけの女は初めての性感に不安と喜びがあった。

興奮した男の物を薄暗い中初めて直視する。

思った以上に大きい。

そして逞しいと感じる。

だが、愛おしいとも思う。

手と口だ。

互いに刺激しあう。

初めて異性に触れられた同士達するのは早かったと言える。

それでも回復は早かった。

互いに準備は万全でついに互いの初めてが繋がったのだ。

「痛くない？」

「うん、大丈夫」

涙した。それは嬉しさと痛さが交わったもので悲しいものではなかった。

二人は実感する。

繋がり合うことの愛おしさと快樂に心まで浸されて満足できるのだ。

朝帰りだ。

高町なのはは自分の中に残る痛みと確かな心の温もりを感じて満足気に自室に戻る。

時計の針は5時を示しており、自室で寝ているはずの親友を起こさない様に静かに扉を開いたのだ。

「げ、フェイトちゃん？」

「おかえり。なのは。随分遅い帰りだね」

高町なのはとフェイト・テストロッサ・ハラオウンは10年来の親友である。

その親友の感情が読めない。

無表情を貼り付けにした顔が怖いと思った。

「ち、ちよつとお仕事で、話が長くなってそのまま外泊しちゃった」

「ふーん……。その話し相手って誰？」

正直に答えるべきか誤魔化すべきか迷う。

これ以上嘘を重ねるのは心苦しい。

「えーと、ケイタ君と、仕事の話……」

「それって二人きりで、しかも高いホテルで、一緒の部屋で！  
泊まって！ することなのかな？」

激昂だ。

だが、

「でも、結ばれた事をお祝いするのが親友かな？」

泣かれた。

どこで私達の情報を手に入れたか気になるが目の前の人物を落ち着かせないといけない。  
情緒不安定だ。

「落ち着いて、フェイトちゃん！」

「私、落ち着いてるよ？ だからね、お願い聞いて？」

明らかに落ち着いていない。

だから相手の言い分を聞こう。

「な、何かな？」

「なのは私達との約束を破って裏切った。だから私も裏切っていないよね？」

何を？ と聞こうとしたが、

「今度の休み。ケイタ君貸して？」

無表情のまま告げられた。

「目撃情報と、ホテル側の顧客情報から間違いないですー」

八神はやては報告を聞いて頂垂れた。

まさか約束を翌日に破られて、さらに膜まで破られているとは。

「さすが、エースオブエースや。名実共に誰よりも先にいきおる。こっから先は戦争や！」

それはつまり、

「手段、場所を選ばず、犯せ」

勝てば良いという目的のためには手段を選ばない卑劣な手だ。

「しかし、主はやてよ。私達が先に、その、してしまってもかまわないのか？」

「かまわへんで。何故なら、ヴォルケンリッターは私の所有物扱いや。それを理解しているミウラっちは事後、必ず私の元へ来る。すいません。貴女の物に傷を付けてしまいましたと。そこでや！私は優しく答える。別にいいんや。男女の仲なんてどうなるかわからへん。でもな、責任をとらないかん。わかるな？ 私の言うこと一つ聞けば許したる、と」

「で？」

興奮した様子の主に問う。

「それでや。ミウラっちは言うことって何と聞く。それは、私を娶ることや。そうすれば万事解決。所有者を妻にすればそれに連なるヴォルケンリッター付きや。愛人3人やで？ お得パツクや。これに乗らん男はおらへんやろ?!」

ああ、そうか。主はやてはバカだ。

「はやてちゃん自体が攻めに行ったりしないんですか？」

シヤマルがバカに問うた。

「は、恥ずかしいやん」

頬を朱に染めて顔を押しさえる手は可愛らしいのだが、

「何を今更。はやて。私が一緒について行ってやるぜ」

ヴィータもバカだった。彼に幼女趣味があるかは知らないが、ヴィータは結構可愛がられている。だからこそ近づきやすいと自負しているのだろう。全く。

私は剣術指南役で明日彼と会うというのに。忘れているみたいだ。それに言う必要ないはずだ。一番槍は私が頂くとしよう。

男女は大人の階段を駆け上がる。結ばれた絆。刻まれた傷跡。

配点：（契）

セーフなはず。

あと、エロ描写に抵抗がある人はすまんね。読ませておいて謝罪とか作者は阿呆だな。

### 第三章 結びと親友（後書き）

誤字修正

多いな。

気をつけます。

#### 第四章 烈火の将は実力派（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りとマジで原作崩壊しています。



## 第四章 烈火の将は実力派

烈火の将と言えば管理局でも名高い近接戦闘の達人である。

その彼女は人に物を教えると言う行為が苦手であり基本的には新人に教えることをしていない。

しかし、模擬戦の訓練を頼まれば受ける位の気概は持ち合わせている。

シグナムと交流を深めたいと思う下心のある男性局員は初め狂喜した。

だが模擬戦訓練は決闘という名であり、完膚なきまでに相手を叩きのめすシグナムに訓練を願う局員は激減した。

今ではミウラ・ケイタとエリオ・モンディアル位しか訓練という名の決闘を申し込む相手がいないのだ。

何故ミウラ・ケイタが剣術指南役としてシグナムに訓練を頼むかというと、それは生き残るためであった。

彼は決して強いわけではない。

総合ランクはAランクだ。

保有魔力量が平均値を底上げしているため総合的なランクはAなのだが、個々で見ると平均Cランク程度である。

それでも数多くの戦歴を持つため戦い方自体は巧いのだ。

後方支援が彼の役割だが、各ランクを高める事に必要性を感じている。

それは彼一人が取り残された状態でも生き延びる術の獲得のためだ。まずそんな状況は起こりえないが、万が一という事がある。ならば、不測の事態に対応するためにも様々な技量の確保は必然であった。

その一つが剣術であり、近接戦闘の技術であった。

「筋はある。だが、防御ばかりが巧くなっても話にならんぞ」  
「仕方ないよ。身を守る前提で習ってんだし」

互いに握るのは木刀である。だが、身につけているのはバリアジャケツトだ。

これは訓練であり殺し合いではない。  
だから、デバイスを使う事はないのだ。  
それでも実力差は明らかだ。

「ケイタは見切りがいいが、攻撃がなっていない。身を守るなら敵を倒すのが一番だ」

ピンクのポニーテールが揺れる。  
横払いの剣筋だ。

「そう、ここで避けたなら相手に隙があるだろ？ ソコを突け」

言われた通りに突く。  
が、返す刀で弾かれる。

「と、まあ、私くらいになると返し技が間に合っとうなる」

喉元に木刀の先が突きつけられた。

「降参だ」

負けを認める。初めから勝つことが目的ではない。

「うむ。だが、落ち込むことはない。負けない戦い方をすればケイタに勝てる相手はなかないぞ」

「それでいいさ」

こんなもんだろう。

才能というものがなく、努力の果てに辿りつける限界値を見定める。シグナムクラスの近接戦闘技能を持つ相手に30分位持つかどうかだ。

「今日は終いだな。ふ、風呂に行くが、い、一緒に……は、入るか？」

「は？」

何を言った？

風呂と一緒に入るだと？

何の策略だ？

時間的に訓練場近くの風呂場は空いているだろう。

何せ早朝だ。

そうは言って誰もいないとは限らない。

「うん、そうだな。そうだ。一緒に風呂に入る。訓練の疲れを取るにも必要だな」

自分に言い聞かせる様にシグナムは言った。

聞き違いでもなく、現実に聞いた。

そして、

「いやいやいや！俺にはなのはっている彼女がいますから！」

「知っているが？」

当たり前のように答えられた。

あれ？間違ってるのは俺の方なのか？

それほどハッキリした言葉だ。

「細かい事言うな、な？ な？」

ミウラ・ケイタはシグナムに捕まってしまった。

逃れる事は出来無い。

連行される。

風呂場。シャワーのみの簡単な設備ではなく、ちゃんとした浴場になっっている方に連れ込んだ。

それも女湯の方に。

ミウラ・ケイタを先に押し込み、シグナムは女湯の前に清掃中の看板を立てる。

「ふ、完璧だ」

多少強引だったかな？

いや、主のはやては言った。どんな手段を使っても良いと。

ケイタには逃げられないようにバインドをかけてある。

踵を返し脱衣所に向かう。

「バインドまでかけて、本気かよ」

「ああ、なあに、スキンシップだ。エリオだって訓練のあとは皆と一緒に風呂に入ってるぞ」「」

「アイツは子供だろーが！」

知らんな。

脱ぐ。豪快に。

脱がす。豪快に。

うわ、これがアレか！

会議のあとの勉強会で見た映像の物より大きいぞ？

「拙者、下心なぞ持ちあわせておらんで御座る」

「おい。侍になってんぞ」

浴場にて、身体を清めたのだ。隣同士に大きめの風呂に入っていた。シグナムは終始いつも通りを装っており、それを見てミウラ・ケイタは勘違いした。

ミウラ・ケイタはシグナムがただ己をエリオと同じような扱いをしないでただと思ったのだ。

思えばシグナムの見た目は若いが実際の年齢は遙か年上であることに気付いたのだ。

しかし、それはシグナムの策略であった。

「さてつと」

「出るか」

私の覚悟は決まった。

手を動かす。

握るのは男性の弱点だ。

「ち、ちよ、何してんの？」

だが、お湯の中確かに熱くなるモノがあった。

つまり私に反応しているのだ。

直立させる。

もちろん、そっちの方ではなく身体の方を。

勉強会の映像ではコレを口でしたり、胸で挟むのであったな。ならば、学んだ事を実行する。

抵抗があるが、両手を相手のお尻に添えて持ち上げるように支える。座り込む事もできず、ただ私の頭を押さえる様に相手は手を添えた。が、その程度の力で止まることもなく、頭を上下に動かす。

舌も、そして吸引する。

窄んだ口内に出された。

確か飲むのであったな。

苦い。だが、癖になりそうな味だ。

相手を持ち上げてタイル貼りの風呂場に寝かせて襲う。痛みが走るが我慢出来る範疇だ。

「ふふ、入ったな？ ん？」

「や、やめろ。俺には彼女が……」

口を口で塞ぐ。

事後、その日のシグナムを見た男性局員はいつもに増して美しいと感じた。

一方、疲れた顔とうつろな眼で歩くミウラ・ケイタを見た局員は仕事熱心にも程がある。彼に休みを、と考え仕事の効率が上がったという。

裏切りと謀略。

策略と搾取

配点：（剣士）

どこまでがセーフなのだろうか？

やばくなったらノクターンへ行為の部分だけ移動させよう。

あと今更ですが細かな設定とかは気にしないで下さい。

原作を見なおしたりWIKI見たりしてますが、間違っけていても気にしないでね。

#### 第四章 烈火の将は実力派（後書き）

今日から休みに入る人も多いでしょう、ということでも更新。



## 第五章 どうかしている人達（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

## 第五章 どうかしている人達

どうしよう？

どうしてこうなった？

恋人がいるのに他の女の子と関係を持ってしまった。  
浮気したら殺されるかな。

いや、アレは浮気ではない。

無理矢理と言う名の何かだ。

反応してしまったのは仕方がない。だって男の子だもん。  
無かった事にしよう。

いや、八神はやてがいる。

アイツがヴォルケンリッターの行動を把握していないわけがない。  
顔、合わせづらいな。

シグナムは思う。

先んじて奪ったはいいがどうしたものと。

まず、主であるはやてに知らせるべきか？

それとも、なのはに知らせるべきか？

どちらにしても、何らかの反応はあるだろう。

主は寝るだろうか。それとも悔しがらるだろうか。

いや、どうやってそれを成したのかを問うだろう。

さらに、行為の詳細まで聞く。

その上で、ミウラ・ケイタを私から取り上げるだろうな。

ならば、黙っているか。

思いたすのは、朝の快樂である。

始めてであったが、よほど相性が良かったのだろう。痛みはあったがそれ以上に快楽と満足感があった。アレを主に渡してしまったら、きつと墮落する。騎士であるからこそ、主を守る役目として盾となろう。アレの味を知ってしまったら主は駄目になってしまう。

「是非も無し」

私が墮落を受け止めようではないか。

高町なのはとフェイト・テストロッサ・ハラオウンは普段通りであった。

結局、高町なのははフェイト・テストロッサ・ハラオウンの望みである、ミウラ・ケイタを今度の休日に貸すと約束したのだ。

そうしなければ相手が正常にならないと判断したためである。

また、過去の約束を破ってしまったという罪悪感からも仕方なしに承諾したのだ。

だが、高町なのはは傑物である。

貸すとは言ったけど、私が付いて行かないとは言っていない。

それに、ケイタは私の彼氏だ。なら、彼女である私が付いて行っても問題はないはずなの。

恐ろしいほど静かな日であった。

管理局には珍しく、比較的事件も少なく、警報もならないのだ。

警察と同じような組織としてそれは喜ばしい事である。

だが、その静寂も昼過ぎに緊急事態を知らせる警告が鳴り響いた為

管理局は揺れた。

そう、時空管理局本局が揺れたのだ。  
それは、

「、全管理局員に警告！ 高町なのは教導官及び、ミウラ・ケイタ教導官が意見の対立の為、戦争してます！マジヤバイです！アレが、エースオブエースと『不敗の魔法タンク』の戦い！皆！見ないと損だよ！え？止める？無理無理！だって無敵のエースと不敗のミウラ・ケイタですよ！」

局内放送に管理局員は揺れた。

「これは、仕事どころじゃねー。今すぐ見物だ！滅多に見られるのんじゃないぞ！新人、俺が許す！仕事を一時中断して見に行くとぞ」

「さすが、上司！ついて行きます！」

「我が隊も私に続け！戦術の神とまで謳われるミウラ・ケイタの生戦闘が見れるぞ！」

「エースオブエース、高町なのはか、不敗の魔法タンク、ミウラ・ケイタかどちらが勝つか……。さあ、賭博だ！お前らどっちに賭ける？」

「あわわ！ヤバイですよ。非殺傷設定でもマジ殺し合いに見えるんですけどー！」

「大丈夫だ。問題ない」

各自、思いはそれぞれだが、レベルの高い訓練だと自分自身に納得させる理由を思い描いていた。

シグナムに襲われちった。テヘツ。  
ってやれば許されると思ったんだが、マジ怒りでマジモードでマジ砲撃を撃ってくるとはね。  
管理局本局の局員達は見物に徹するみたいだ。建物に被害が出ないようにバリア貼って、用意周到な事だ。止めるのを諦めてこちらが力尽きるのを待つスタンスだ。  
さて、俺の彼女で怒りモードの高町なのは空戦S+だ。一方俺は空戦B。教官試験ギリギリのBだが、それは実技試験のランクで筆記試験は満点だ。

「こうやって、本気で戦うのっていつ以来？」

「んー？ 確かなのが開催した小学校卒業記念決闘トーナメント以来だね」

確か合っているはず。

「懐かしいね。あの時より私、強くなってるよ？」

「そりゃ余りある天賦の才能に努力を重ねて弱くなる奴の方がおかしいって」

俺だってそこそこに強くなっている。

悠長に話し合っているが、砲撃の威力は本物だった。

ダイバインシューターで包囲されて外から見れば窮地に見えるだろうな。

「観念した？ 今ならシグナムさんとは事故ってことで我慢してあげるけど？」

「事故っていうか、相手は狙ってやった節があるから今後もないとは言えないな」

許すも何も、シグナムに襲われたって言った瞬間に砲撃だもんな。今になってやっと少しは冷静になってきたようだ。

「それに、俺は」

秘匿回線の念話で続ける。

『なのは一筋だって言ったんだけど、相手が聞かなかった』

『それでも、逃げるとか、何なら武力行使で倒すとかできたでしょう？ 不敗の二つ名ついてるケイタならできたでしょ？ だったら、それは、私以外に下半身が反応したってことなの！』

「じゃあないだろ。男だし。」

「平行線だな」

「平行線なの」

許す、許さないの平行線。  
だから、負けたほうが悪い。

「意見が分かれた時は」

「決闘なの！」

見物していた管理局員は感嘆をあげる。

「あの状況下から脱出できる術があるとは……」

「砲撃をギリギリで避けて砲撃線上を飛んで反撃？」

「それをいなして、さらに反撃。クロスカウンターをさらにカウ

ターで返す高等技術だぞ……！」

「高等技術のオンパレード。新人はこれを見て学べ！ 盗め！」

「魔法弾をチェインバインドで弾いた？！ あんななどの教科書にも乗ってないぞ?!」

「いや、可能だ。魔法である以上、通じる。が、あんな使い方があるとは……。不敗の名はあの柔軟な発想と魔法技術の多さで成り立っているというのか?!」

その後、3時間に及ぶ戦闘は両者引き分けで終わる。

エースオブエースはその実力を名実共に再度知らしめ、不敗のミウラ・ケイタはやはり、不敗であった。

ぶつかり合う恋人達。

天才と秀才。

果たしてどちらが優秀なのか。

配点：（痴話喧嘩）

聖戦に参加の皆様方、作者です。

暇つぶしにどうぞ、あと、なのは完売！

身体に気をつけて戦いに挑んで下さい。

私は実家でのんびりしてます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7866z/>

---

なのは一途のはずがどうしてこうなった？

2011年12月29日07時13分発行